

—山梨県東山梨郡三富村

上荻原遺跡発掘調査報告書

1983. 3

三富村教育委員会

— 山梨県東山梨郡三富村 —

上荻原遺跡発掘調査報告書

1983. 3

三富村教育委員会

序 文

国道140号線用地の調査を昭和56年度に行ない、平安時代の土壙群が発掘され、報告書第1集として昨年刊行致しました。

教育委員会の出土品調査によると下荻原や青笹川の奥地、通称古屋敷などから縄文時代の土器が出土しており、本村にもこの時代の遺跡がいくつか存在することが知られております。

今回、役場庁舎及び基幹集落センターの敷地内の発掘調査を実施するはこびとなり、大きな期待をかけて調査にかかりました。約1ヶ月間の調査の結果、縄文時代中期末から後期初頭にかけての土器・石器等が発見されました。これらは、本村の文化・歴史を考える上で貴重な資料であると考えます。

遠く当時の生活を思うと、付近の山に獣を求め、投網で魚を獲る先人達の姿が眼前に浮ぶような気がいたします。また、今回の発掘からこの付近が本村の文化の発祥地であり、中心であったのではないかと想像されます。やがて建つ役場新庁舎と基幹集落センターが、村民の生活文化の中心となることを考えますと、縄文時代に暮らした人々との奇しき縁であるといえましょう。

今回の調査成果が広く活用されることを望み、調査にあたられた関係者各位に感謝の意を表し、序文と致します。

昭和58年3月31日

三富村教育委員会

教育長 日原龍雄

凡　　例

1. 本書は、山梨県東山梨郡三富村川浦字川岸263-2番地に所在する上荻原遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 調査は、三富村教育委員会が実施し、野田が担当した。
3. 遺物の整理、トレイス、拓影、は野田が行なった。
4. 本書の執筆、編集は野田が行なった。
5. 遺物及び実測図は村教育委員会に保管してある。
6. 発掘調査から報告書作成までに、次の諸機関、諸氏より御助言、御協力を賜った。銘記して御礼申し上げるしだいである。（敬称略）
県文化課、県埋蔵文化財センター、村役場振興課、広瀬土木、末木健、坂本美夫、新津健、米田明訓、八巻与志夫、佐野勝広、渡辺儀訓、金沢道篤

調　　査　組　織

1. 調　　査　團　長　日原龍雄（三富村教育長）
2. 調　　査　員　野田昭人（国学院大卒）・日原喜昭（山梨学院大卒）
3. 作　　業　員　岡部操・岡部多賀子・日原千賀子・名取栄子・藤井なみ子・梶野よし子・坂本さく子・名取まさの
4. 調　　査　事　務　局　山口皓亨（三富村教育委員会）

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| I . 調査の経過 | 1 |
| II . 遺跡の環境 | 1 |
| III . 層序 | 3 |
| IV . 遺構と遺物 | 4 |
| 1 . 遺構 | 4 |
| (1) 土壙 | 4 |
| (2) その他の遺構 | 6 |
| 2 . 遺物 | 6 |
| (1) 縄文時代の土器 | 6 |
| (2) 縄文時代の石器・石製品 | 16 |
| V . まとめ | 16 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 2 |
| 第2図 トレンチ配置図 | 3 |
| 第3図 層序模式図 | 4 |
| 第4図 B区全体図 | 5 |
| 第5図 第1号トレンチ全体図 | 6 |
| 第6図 B区第1号土壙平面図・セクション図 | 6 |
| 第7図 B区第2号土壙平面図・エレベーション図 | 7 |
| 第8図 出土土器拓影(1) | 8 |
| 第9図 出土土器拓影(2) | 9 |
| 第10図 出土土器拓影(3) | 11 |
| 第11図 出土土器拓影(4) | 12 |
| 第12図 出土土器拓影(5) | 14 |
| 第13図 出土石器・石製品実測図(1) | 15 |
| 第14図 出土石器・石製品実測図(2) | 16 |
| 第15図 出土土器拓影 | 18 |

図版目次

- | | |
|----------------|-------------------|
| 図版1 遺跡全景（北より） | 図版7 出土遺物（土器） |
| B区下段全景（東より） | 同 上 |
| 図版2 第1号土壙 | 図版8 出土遺物（土器） |
| 第1号土壙セクション | 同 上 |
| 図版3 第2号土壙 | 図版9 出土遺物（土器） |
| 同 上 | 出土遺物（把手） |
| 図版4 第1・2号溝状遺構 | 図版10 出土遺物（石器・石製品） |
| 第1・2号溝状遺構セクション | 同 上 |
| 図版5 第3・4号溝状遺構 | 出土遺物（炭化物） |
| 石棒出土状態 | |
| 図版6 出土遺物（土器） | |
| 同 上 | |

I. 調査の経過

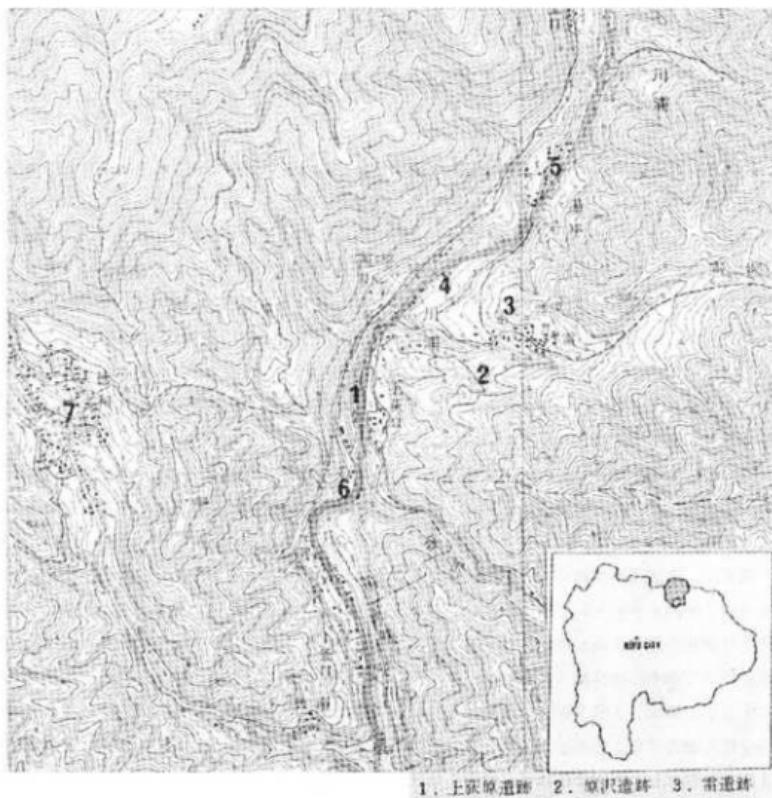
昭和47年の県教育委員会による山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査によると三富村には7ヶ所の遺跡が存在する。上荻原遺跡は、その中でも立地条件がよく、ひょくに重要な遺跡であると考えられており、以前から地元の人々によって縄文時代の土器・石器類が採集され、その存在が広く知られていた。折しも昭和56年、老朽化のめだつ村役場庁舎の新庁舎の建設とそれに併せて村民の間に強く建設が望まれていた基幹集落センターの建設が計画され、その建設地に川浦字川瀬の国道140号線沿いの地区が決定された。しかしながらこの地は、国道140号線を挟んだ東側河岸段丘上が、上荻原遺跡であり、建設予定地内の西側段丘上にも遺跡の範囲が及ぶものと考えられる所から、県文化課の指導を受け、たび重なる協議の結果三富村教育委員会が事前調査を実施することとなった。

遺跡名は、調査区そのものは川浦字川瀬の地に含まれるが、東側段丘上の上荻原遺跡の分布範囲に包括され、同一遺跡であると考えられることから遺跡台帳に載る上荻原遺跡と呼称することとした。

調査は、造成工事開始直前の昭和57年4月1日より開始し、まず遺構の確認を行うために予定地内に統計6本のトレンチを設定し、調査を進めた。（第2図）その結果、第1号トレンチ内より溝状の落ち込みが検出され、第3・4号トレンチからは、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての土器が発見されたため、第1号トレンチにおいては遺構の検出にそって拡張することとし、第3・4号トレンチに関しては、この地区が新庁舎建設予定地内であるため予定地内全体を調査することとした。調査区を遺構の検出状況から第1号トレンチを設定した調査区北側をA区とし、新庁舎建設予定地内をB区とした。調査は4月12日より、第1号トレンチの拡張、B区においては重機による表土の剥ぎとりを行い、遺構の検出を進めた。その結果、第1号トレンチからは、時期、性格不明の溝状遺構4本とピット8基が、B区からは、縄文時代中期末葉から後期初頭の上層2基と包含層から同時期の土器・石器類が、また、第1号トレンチと同様、時期、性格不明の溝状遺構14本とピット11基が検出され、4月28日をもって調査のすべてを終了した。

II. 遺跡の環境

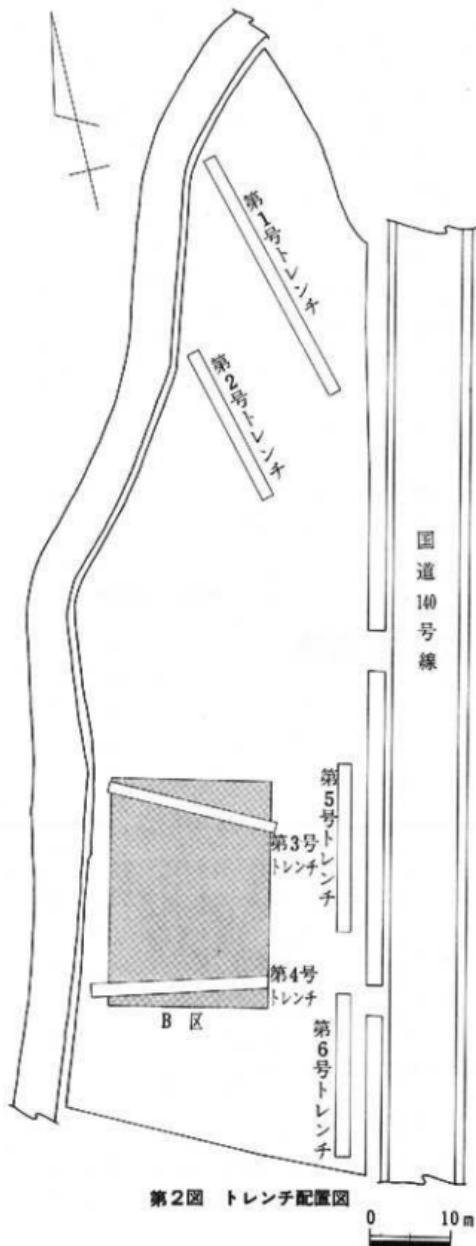
夏、秋の観光シーズンを迎えると、秩父多摩国立公園を北側に擁する静かな山村にもわかに活気づく。東沢・西沢渓谷に夏の涼をもとめ、あるいは紅葉の渓谷美に魅せられ多くの行楽客が訪れるからである。この東沢・西沢渓谷にその源を発する笛吹川は、山間部を深いV字谷を形成しながら甲府盆地へと流れ出る。上荻原遺跡は、この笛吹川が形成する深いV字谷の左岸



第1図 遺跡位置図

段丘上、山梨県東山梨郡三富村川浦字川瀬の地に立地する。（第1図）遺跡の主体が上荻原地区に立地するため上荻原遺跡と呼称されている。遺跡は、笛吹川の蛇行によって形成された南北方向へ傾斜する河岸段丘上に立地し、山間部の三富村にあっては、わりと広い平坦面を形成し、標高690mを計る。遺跡からは、北側に秩父山系甲武信岳を望むことができ、晴れた日には遠く南に駿峰富士を仰ぐことができる。本遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡として原沢遺跡、雷遺跡、下荻原遺跡等が存在し、昭和56年に調査され、平安時代の土壙群が発見されたと報告されている見焼遺跡などが立地する。

歴史的にこの地が注目されるのは中世武田信玄の時代である。信玄が軍事的街道として整備した九街道のうちの1つである古府中を起点とする雁坂口がこの地を通り、雁坂峠を越え武藏に通じていた。今日でも当時の烽火台、砦とされる所が何ヶ所か残っており、北関東への抑え



第2図 トレンチ配置図

の重要な路であったことが窺える。この街道は、現在国道 140号線となっているが、埼玉県との県境、雁坂峠付近が未開通となっており幻の国道と言われている。

今日、国道の終点となっている広瀬に広瀬ダムがある。昭和50年に完成し、峠東地区の水害メとして利用されているだけでなく、人造湖の広瀬湖は、東沢・西沢渓谷と共に観光名所の一つとなっている。

遺跡の北、川浦の地は、信玄の隠し湯といわれており、今日でも多くの湯治客が訪れている。

また、この川浦より北の赤の浦には大嶽山那賀都神社がある。山懐に鎮座するこの神社は、山岳信仰の神社として今日でも多くの信者を集めており、毎年4月には、春の大祭が盛大に執り行われ、村をあげての祭となっている。

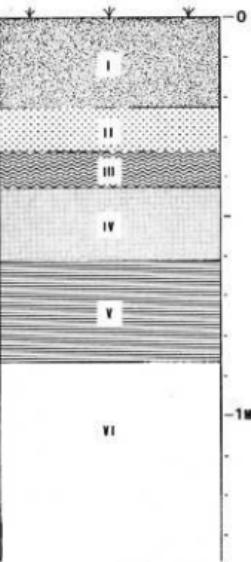
このように遺跡の周辺には、名所旧跡が散在しており、“笛吹の里”として静かな脚光を浴びている。

調査区の現況は、水田と桑園であり、水田構築に際し、かなりの地形の変更がなされていることが窺える。

III. 層序

本遺跡における層序は、B区第3・4号トレンチの所見を基に模

式図としたものが第3図である。層序は、上位から下位にかけて、第I層・耕作土層、第II層・赤褐色土層（水田床土）、第III層・黒褐色土層、第IV層・黄褐色土層、第V層・黄褐色ローム層、第VI層・黒褐色砂質土層の順に堆積しており、このうち遺物包含層は、第III層及び第IV層であるが、水田構築の際の地形の改変によって第III層、第IV層が削り取られてしまっている部分もある。調査区は、もともと南西方向に傾斜しながら西側の笛吹川の深い谷に至る地形であるが、B区には2枚の水田が構築されており、中央の石垣を境とする上段（北側）の北から東の部分にかけて、同様に下段の北から東にかけては、第VI層の上位に第II層が直接堆積しており、水田構築に際して遺跡のかなりの部分が破壊されてしまっていることが見える。遺構の検出がわずかに土壤2基という要因も後世の地形改変が大きく起因しているものと考えられる。確認面は、第III層及び第VI層とした。遺構は、第1号土壙が第VI層に掘り込まれており、第2号土壙が第V層に掘り込まれていた。



第3図 層序模式図

IV. 遺構と遺物

1. 遺構

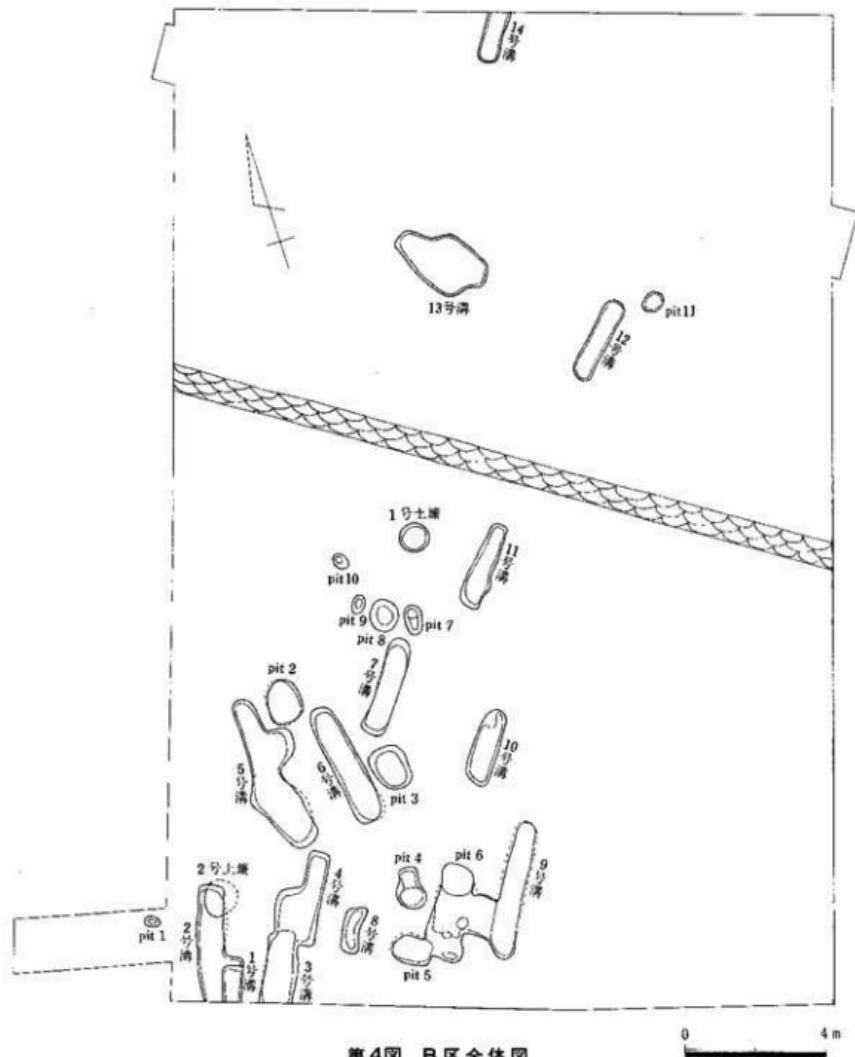
(1) 土壙

○1号土壙（第6図）

本址は、B区下段の北側に位置し、第VI層精査の際発見された。平面プラン82cm×85cmのはば円形のプランを呈し、確認面からの深さ28cmを計り、第VI層に掘り込まれている。中央に縄文土器底部が埋められており、平面及びセクションにおいても焼土が認められることから埋蔵炉である可能性も強いが、上部が削平されており、関連遺構もなく、確定要素に欠けるため一応土壙としてあつかっておくこととした。出土した縄文土器底部片は、強い二次焼成を受けており、ひょろにもろく復元不可能であったため図面に示すことはできなかった。また、底部片であるため文様もなく、詳細な時期は不明であるが、器形、胎土から縄文時代中期末から後期初頭のものであると考えられる、第I層の焼土内からクリと思われる炭化物片が出土している。（図版10）

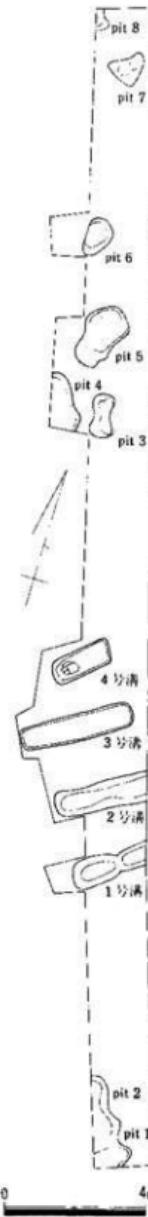
○第2号土壙（第7図）

本址は、B区南側の第2号溝状遺構調査中に発見された。第2号溝状遺構底部精査中に焼土が確認され、本址の落ち込みが検出され調査に至った。袋状を呈し、最大部90cm×95cmの円形



第4図 B区全体図

プランで確認面からの深さ85cmである。開口部の西側半分を第2号溝状造構によって切られているため正確な断面形はわからないが、東側へ片側方向にだけ袋状を呈する形態であると思われる。底面には、中央よりやや北によりに50cm×30cmの平板の石を敷き、そのまわりにやや小ぶりの石を置き、意識的に石を敷くような状態であった。出土遺物は第9図7~12が出土しており、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての遺構であると考えられる。



(2) その他の遺構

その他本遺跡からは、溝状遺構が総計18本、ヒットが19基検出されている。これらからは出土遺物がまったくないか、あるいはあっても少量の縄文土器片と土師器片、須恵器片が混在して出土しており、溝状遺構の主軸方向も第1号トレンチにおいては南西方向に、B区においては、北東、北西方向という3種類の規格的方位性をもっている。しかし、覆土は、しまりのない黒褐色土で覆われており、調査段階においてその時期、性格の把握に苦慮した。結局、決定的な性格の把握には至らず、一応溝状遺構としたが、明確に遺構であるとは認められないことからこれらすべてに対していちいち説明することは避け、B区第1号溝状遺構に関してだけ若干の説明を加え、他のものに関する説明は省略することとする。

○ B区、1号溝状遺構（第7図）

本址は、第2号溝状遺構の東半分を切って、構築されており、標準層序の第III層から切り込まれ、第V層に掘り込まれている。南側が調査区外であるため、長軸の長さは不明であるが、巾は、上端において80cm、下端で56cmを計り、確認面からの深さは93cmである。セクション図（第7図）をみると第I層から第III層までしまりのない褐色土によって覆われている。出土遺物は、縄文土器と土師器の小破片が数点覆土より出土している。

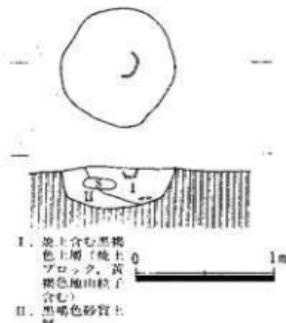
2. 遺 物

今回の調査で本遺跡から出土した遺物は、縄文時代の土器・石器が主体となっており、他に極く少量の土師器片と須恵器片が出土している。縄文時代の土器は、中期末葉から後期初頭にかけてのものが主体をしめ、石器は石錘・石匙・凹石・磨石・石製品として石棒・重飾が出土している。これらのほとんどが、遺物包含層からの出土である。

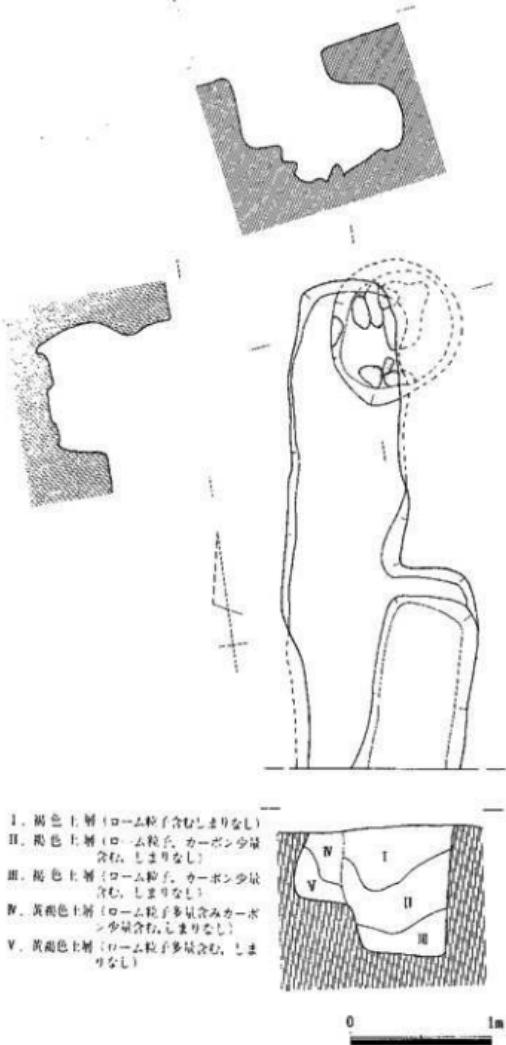
(1) 縄文時代の土器

本遺跡から出土した縄文土器は、中期末葉から後期初頭までのものでその主体は、中期末葉から後期初頭にある。これらの土器群は器形、文様等から4群に分類することができる。それぞれの土器群について説明することとしたい。

(左) 第5図 第1号トレンチ全体図



第6図 B区第1号土壤平面図
セクション図



第7図 B区第2号土壤平面図、エレベーション図

部がやや外方に開く器形で、底部は丸みをもちひじょうに安定が悪い。口縁部に付される微隆起文は、4ヶ所と思われるより突出する部分をもち、胴部文様帶には、△状の沈線による区画が8単位施され、その中に磨消繩文が施されている。色調は、黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。本遺跡出土土器の内、唯一の完形に近い土器で、第3号トレンチ包含層より出土した。

6は、比較的厚く隆起する微隆起を施し、その直下から逆U字状の沈線で文様区画がなされ

○第1群土器（第8図13、14）

縄文時代中期後半初頭に位置すると思われるものである。13は、縄文を地文として縱に降線文が垂下する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。14は、地文に刺突文が施され、曲線的な降線文が貼付されている。この時期の土器の出土は、今回の調査においては極めて少ない。

○第2群土器

縄文時代中期末葉に属する土器を第2群土器とした。本遺跡出土土器の主体をなす土器群である。

〔A類〕

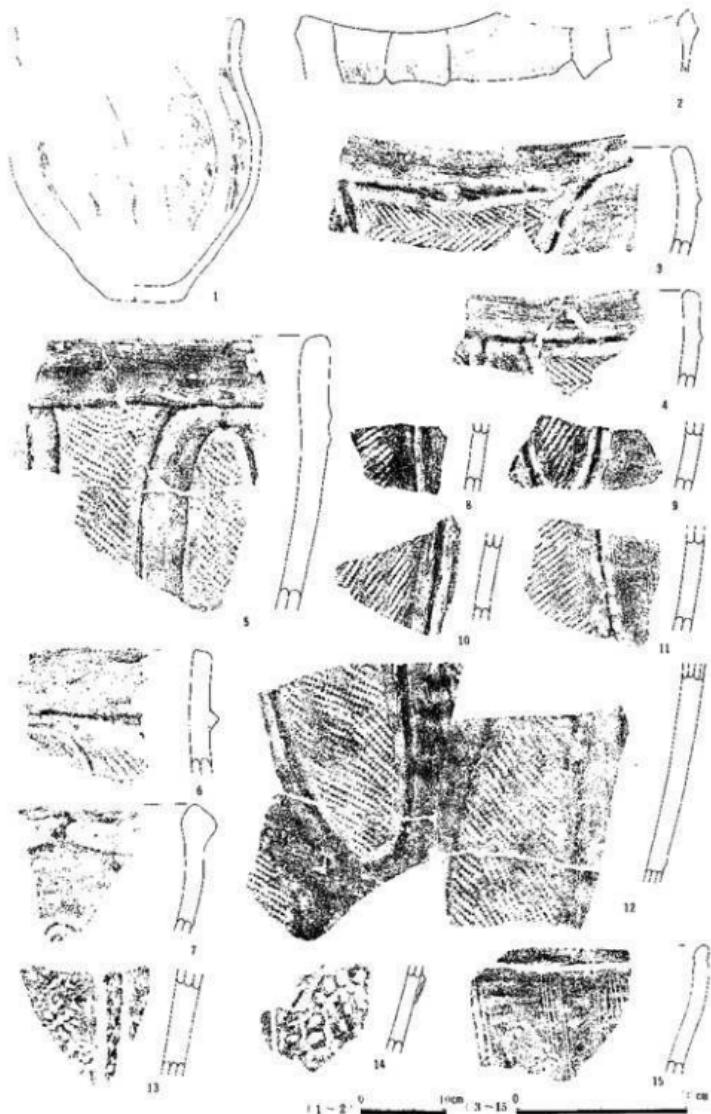
所謂微隆起文土器と呼ばれているもので、口縁部を無文帶として、その直下に微隆起文をめぐらし、口縁部と胴部を文様区画するものである。

1種（第8図1、6、7）

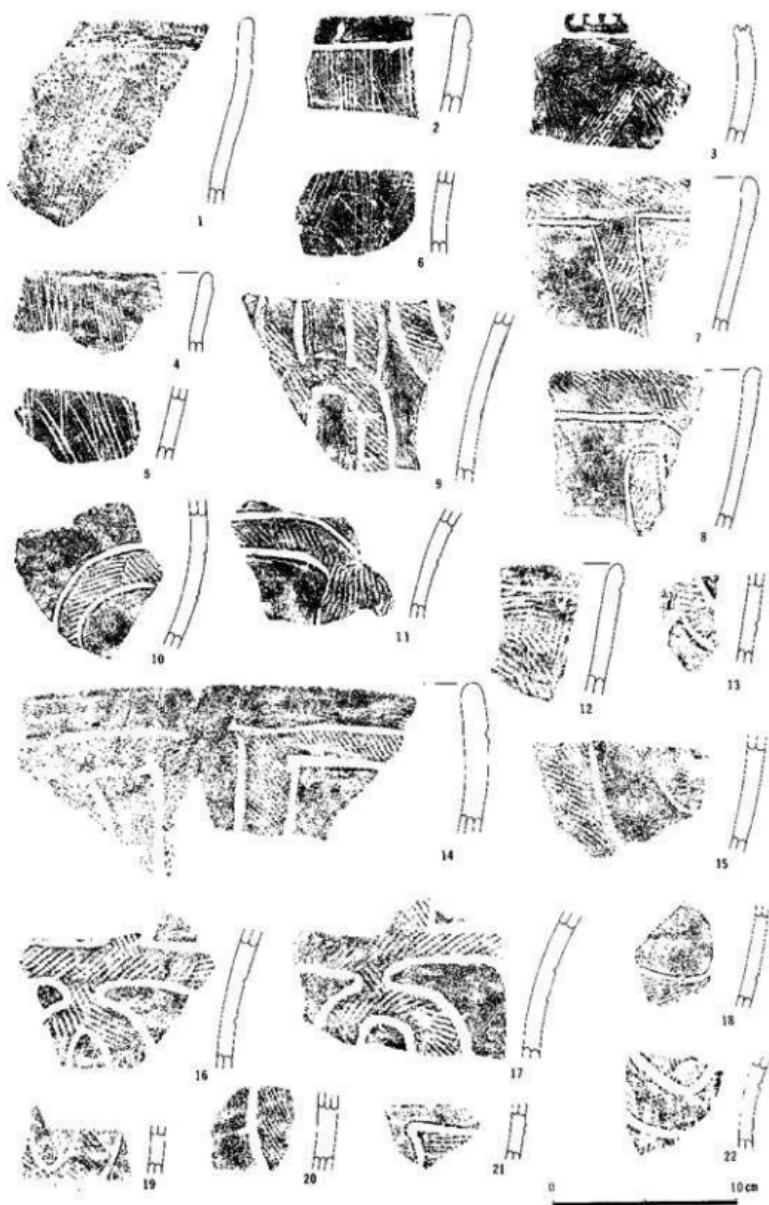
口縁部の微隆起文によって口縁部と胴部が文様区画されるが、胴部文様帶は、逆U字状の沈線によって文様区画がなされ、その内外に磨消繩文が施されるものである。

1は、深体形の器形を有する

が、頭部でややすほり、口縁部が、頭部でややすほり、口縁部に付される微隆起文は、4ヶ所と思われるより突出する部分をもち、胴部文様帶には、△状の沈線による区画が8単位施され、その中に磨消繩文が施されている。色調は、黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。本遺跡出土土器の内、唯一の完形に近い土器で、第3号トレンチ包含層より出土した。



第8図 出土土器拓影 (I)



第9図 出土土器拓影(2)

る。7は、波状の口縁を呈するもので、同じように逆U字状の沈線で文様区画がなされる。

2種(第8図2~5, 8~12)

胸部文様帯もJ字状、逆U字状の微隆起文で文様区画がなされるものである。

2は、波状口縁を呈し、波頂部の微隆起から逆U字状の微隆起文が垂下し、さらにその間に平行する2本の微隆起文によって文様区画がなされ、その間に磨消繩文が施されている。口径43cmを計る大甕である。4も同様の文様構成をもつものであると思われる。

3は、胸部が逆U字状の微隆起文で文様区画がなされると思われるもので、5も同様のものであるが、逆U字状の区画が2段にわたって施されている。

8~11は、いずれも胸部片であり、微隆起文の区画の内外に磨消繩文が施されている。これらの上器は、いずれも赤褐色を呈し、よく研磨されており、焼成も良好である。

12は、U字状、逆U字状の微隆起による区画を交互に配する胸部片で、その内側に磨消繩文を施す。胎土はもろく、焼成もありよくない。

A類における微隆起は、確実に貼り付けていると思われる1, 6を除いて5, 12などは隆起が微細であり、削り出した要素が強いといえる。

(B類)(第8図15, 第9図1~6)

地文に術痕状施文見による条線文を施すものである。

15, 1~4は、いずれも口縁部に一条の沈線が施されるが、15, 2, 3のように比較的太く深いものと、1, 4のように細く浅いものがある。条線も縱方向に施されるもの(15, 2, 4)と斜位に無操作に施されるもの(1, 5, 6)がある。3は、口唇部上端に円形竹管による刺突文が施され、条線は、施文後磨消されている。

○第3群土器

绳文時代中期末葉から後期初頭に属する土器を第3群土器とした。

(A類)

沈線で区画され、その中に磨消繩文が施されるものである。

1種(第9図7, 8, 12, 14, 第10図1, 2, 7, 8, 10~13)

口縁部が平縁のものを一括した。

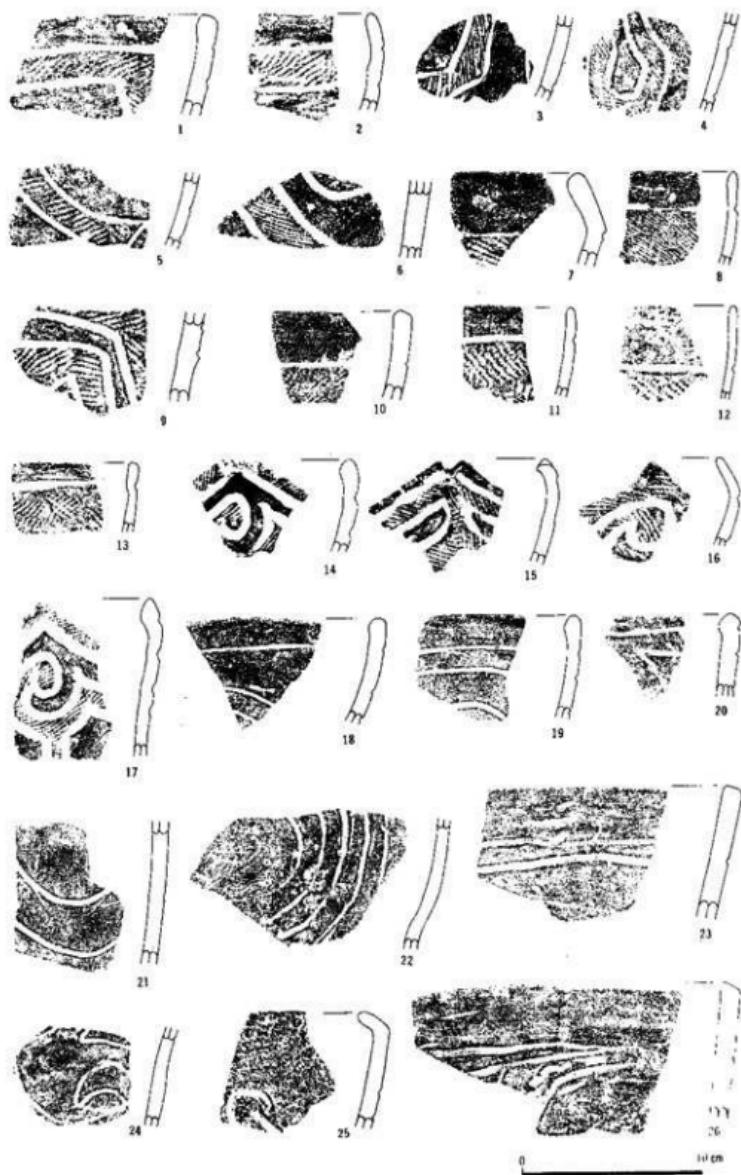
第9図7, 8は、口縁部に平行する一条の沈線によって磨消繩文帯が形成され、そこから直接胴部へ直線的に(7)、あるいはJ字状(8)に磨消繩文帯が垂下する構成をもつものである。第2号土壙より出土した。

第9図14, 第10図1, 2は、口縁部に無文帶をおき、その下に二条の沈線によって磨消繩文帯が施され、やはりそこから連続して、胴部に直線的、曲線的に磨消繩文帯が垂下する。

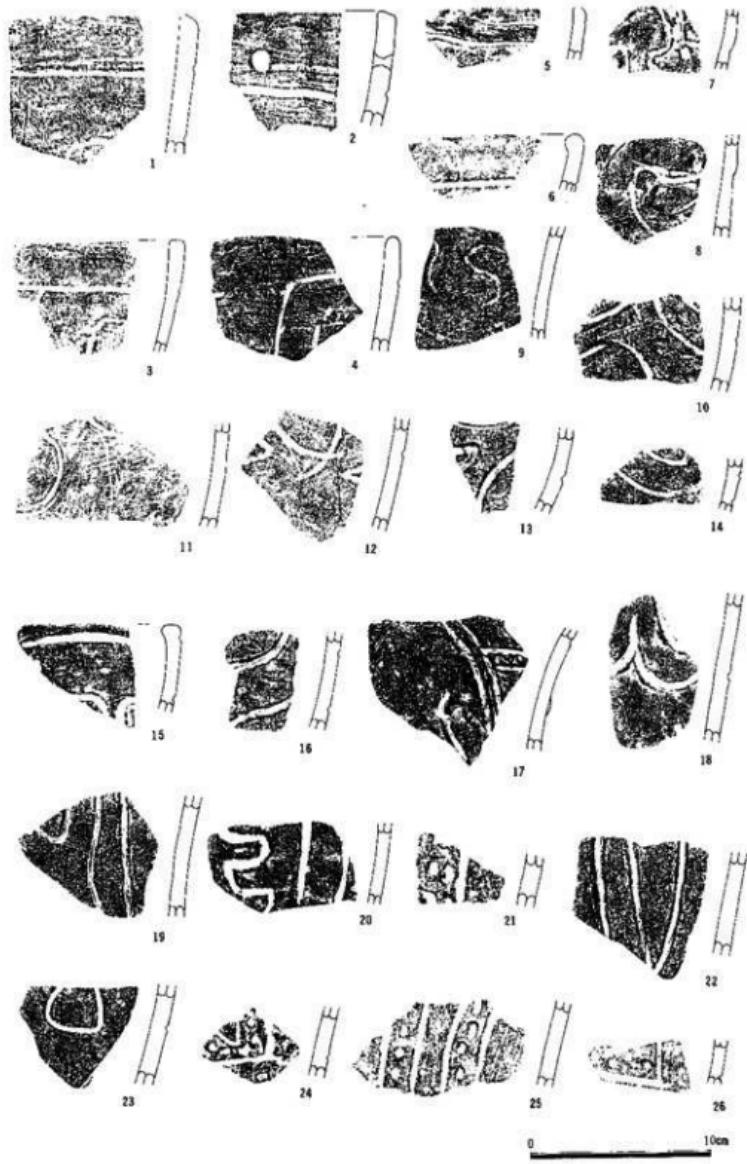
他のものは、口縁部に一条の沈線を施し、その下に磨消繩文が施されるもので、第10図7は口縁部が「く」の字状に内溝し、第10図8, 11~13は、器壁が薄く、13のように口縁部がやや屈曲するものもある。

2種(第10図14~17)

口縁部が波状を呈するもので、太く深い沈線によって文様が構成され、沈線間に繩文が施さ



第10図 出土土器拓影 (3)



第11図 出土土器拓影 (4)

れるものである。

14. 16. 17は、ヘラ状工具によって二条の渦巻状の文様が太く描かれ、その内外に縄文が施される。15は、波頂部が抉られており、直線的な文様構成をもつ。器壁も比較的薄く、沈線が内面にもやや影響し、ミミズ膾れ状に突出している。14. 17は、色調が黒褐色を呈し、よく研磨されている。15. 16は、色調が赤褐色を呈し、焼成良好である。

3種（第9図9～11. 13. 15～22. 第10図3～6. 9）

1種. 2種における胴部片であるものを一括した。いずれも二条の沈線による縄文帶で文様が構成されるもので、ほとんどが直線的、曲線的に描かれる。第9図9は、II字状の文様構成をもち、10. 11は曲線的に縄文帶が配される。9～11は、第2号土壙から出土したもので、黒褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。16. 17は、横位の直線的な縄文帶に曲線的な縄文帶が接続されるもので同一個体である。4は、渦巻状の縄文帶で文様が構成される。

〔B類〕（第10図23. 26. 第11図1. 2. 21. 24～26）

沈線によって文様は画がなされ、その間に列点文を施すものである。

第10図23. 26. 第11図1は、口縁部と胴部を一条の沈線によって区画し、26は、そこから連続して平行する沈線を斜位に施し、その間に列点文を施す。

第11図21. 24～26. 第11図2は、同一個体であると考えられ、沈線によるJ字状文が描かれ、その間に列点文が施される。色調は、黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成良好である。

〔C類〕

沈線文だけで文様が構成されると考えられるものである。

1種（第10図18. 19. 第11図2. 3）

口縁部に一条の沈線が施されるものである。

18. 19は、平行する二条の沈線が曲線的に描かれるものである。2は、口縁部に補修孔が穿たれている。3は、口縁部の沈線の下にL字状の沈線が施される。18. 19は、やや薄手で黒褐色を呈し、口唇部が肥厚化する。

2種（第10図21. 22. 第11図4. 14）

平行する曲線的な沈線が施されるもので、21. 14は、平行する二条の曲線的な沈線が施され、22は、同心円状の沈線が描かれる。4は、L字状の平行する沈線が施される。

3種（第10図24. 25. 第11図7～9）

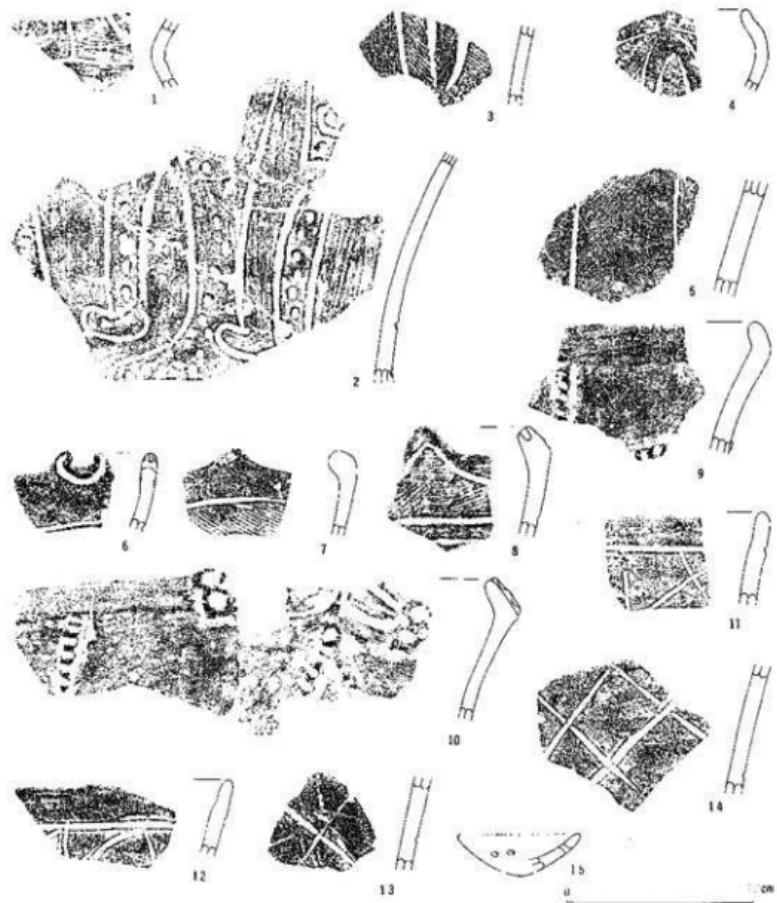
比較的細く浅い沈線によって舌状の文様が描かれるもので、25は、口縁部がくの字状に内消する。

4種（第10図20. 第11図5. 6. 15）

口縁上部に一条の沈線が施され、口唇部が内面で肥厚化するものである。20. 15は、沈線も上部にあり、太く深い、その下に沈線文が施される。

5種（第11図10～13. 16～20. 22. 23）

太く深い沈線によって文様が描かれるものである。無堆作に曲線的な沈線が施されるもの（10～13. 23）と平行する曲線的な沈線が施されるもの（16. 18）があり、さらに部位の平行する



第12図 出土土器拓影(5)

沈線に、横位、曲線、蛇行する沈線が組み合せられるものがある。(17. 19. 20. 22)

6種(第12図11~14)

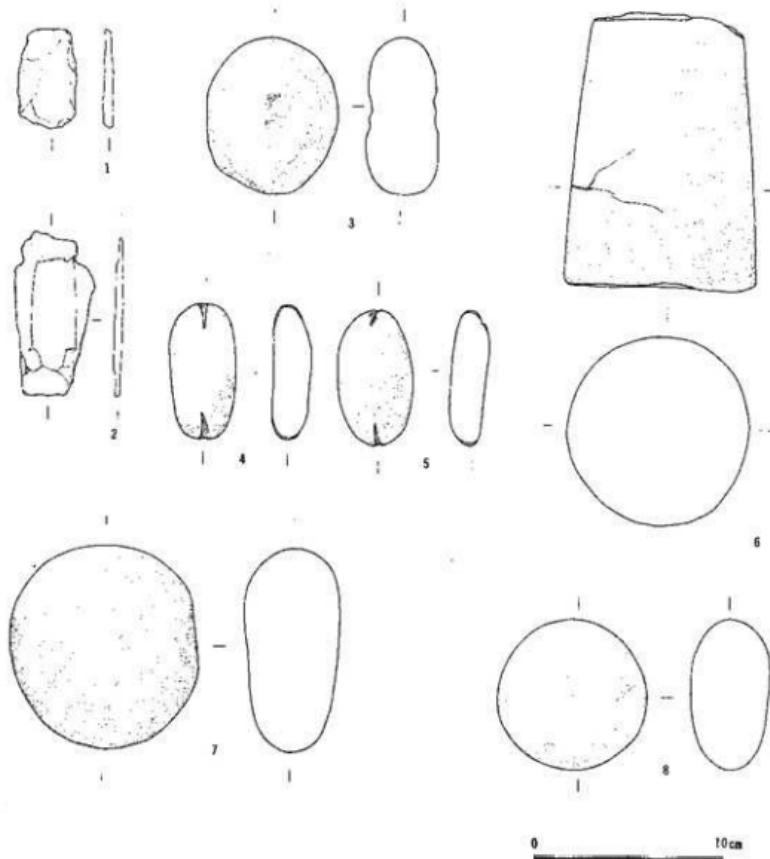
格子目状の沈線が施されるもので、11. 12の口縁部片には、一条の沈線が施され、そこから格子目状の沈線が施される。口縁部は、口唇部で薄くなる。

○第4群土器

縄文時代後期初頭に属するものを第4群土器とした。

[A類](第12図1. 3~8)

沈線によって区画し、その内外に磨消縄文が施されるものである。1. 2. 5は、直線的な沈線によって区画され、その内側に磨消縄文が施されている。6~8は、波状口縁を呈するも



第13図 出土石器、石製品実測図

ので、いずれも口縁部に一条ないし二条の沈線が施され、その内外に磨清繩文が施される。色調は、黒褐色を呈し、よく研磨されている。6は、○状の波頂部を有し、その上端に円形竹管によって孔が穿たれている。7は、波頂部が肥厚化し、8は「く」の字状に波状部が屈曲し、6と同様波頂部に孔が穿たれている。

(B類)(第12図 9、10)

口唇部に8の字状の貼付文が付され、その間を二条の沈線で連結し、「く」の字状に屈曲する口縁部直下から斜位方向に縦線文が垂下する。

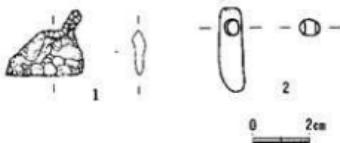
○その他の土器(第12図15)

ミニチュアの有孔土器である。口径6.7cmを計り、2つの孔が穿たれている。縄文時代中期末葉から後期初頭に属するものであると考えられる。

(2) 石器・石製品

○打製石斧（第13図1）

短冊形を呈する扁平の小形の打製石斧である。石材は、粘板岩で、刃部が欠損している。B区、第IV層から出土した。



第14図 出土石器石製品、実測図

○石匙（第13図2、第14図1）

2は、粘板岩を石材とする人形の擬形の石匙で、先端部が欠損する。1は、黒曜石製の横形の石匙で薄く小形である。つまみ部、刃部には入念な剥離調整が行なわれている。先端部を欠損し、重量は、2 gである。いずれもB区、第IV層包含層からの出土である。

○石錐（第13図4、5）

橢円形の自然石を使用した切目石錐である。4は、長軸の両端を4回にわたって摺って切目をつけ、さらにその両側をわずかに摺っている。重量は、100 gである。5も長軸両端を3回にわたって摺って切目をつけ、4と同様その両側をわずかに摺っており、重量は、100 gを計る。いずれもB区、第IV層から出土した。

○凹石（第13図3）

やや長橢円形を呈する安山岩を石材とし、両側に2個づつの違なった凹をもち、両側が軽く磨かれている。

○磨石（第13図7、8）

ほぼ円形を呈する磨石で、7は、安山岩を石材としており、8は、花崗岩を石材として全面がひじょうによく磨かれている。

○石棒（第13図6）

B区、第IV層の包含層から出土したもので、先端部を欠損するが、表面は全面丁寧に研磨されている。

○垂飾（第14図2）

B区、第IV層から出土した。全長3 cmを計り、両側から比較的大きい孔が穿孔されている。

V. ま と め

1. 遺 構

今回、上荻原遺跡から検出された遺構は、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての土壙2基と時期不明の溝状遺構18本、ピット19基である。第1号土壙は、水田構築によって上部が削平されてしまっているため他の関連遺構も認められず、一応土壙としてとり扱ったが、埋甕がとしてもさしつかないと考えられる。第2号土壙は、袋状を呈する土壙で、底部に石を敷くこと、土壙覆土上層から焼土が検出されたことなどがこの土壙の性格を考える上で注目すべ

き点であると思われる。

満状遺構は、出土遺物が縄文土器、土師器、須恵器の破片が覆土内から混在して発見されるという状況で、これらの遺構の時期、性格を解明する手がかりを得ることはできなかった。これと同種の遺構は、すでに本遺跡から500m程北に所在する見畠遺跡より59基発見されている。調査報告書によると本遺跡と同様、出土遺物は極めて少なく、土師器の破片が数点出土しているだけである。見畠遺跡においては平安時代の土壙ではないかとしているが、今回の調査においては、時期、性格については不明といわざるをえない。ただ、覆土の状態、出土遺物等からかなり新しい時期の遺構ではないかと考えられる。

2. 縄文土器

今回の調査によって得られた資料の主体は、縄文時代中期終末から後期初頭にかけての土器群であり、本報告の分類でいえば第2群土器から第4群土器がこれらに相当する。これらを諸型式に対比したならば、第2群土器が加曾利E式土器終末に、第3群土器が称名寺式土器に、第4群土器が堀之内式土器にそれぞれ比定されよう。これらに関して若干の説明を加えておく。

第2群土器は、A類が微隆起土器で加曾利E式土器終末に位置づけられるものである。本県においては、中期終末にこの種の土器の流入が著しいことが一般的に知られており、本遺跡でも主体をしめている。A類の土器は、胴部がU字状、逆U字状の微隆起、沈線で区画されるものが多く、それらの中でも第8図1のように特異な器形のものもある。この土器は、類例をもとめるならば中期終末の土器にみられる橋状把手を付す深体にその器形が類似し、口縁部をめぐる微隆起には突出する部分が4個所存在する。これは橋状把手が簡略化あるいは模倣化されたものではないかと考えられる。しかし、色調・胎土から考えると在地の土器であろう。B類の条線が施されるものも、中期末から後期初頭にかけて加曾利E式土器と伴出するものである。⁽¹⁾

第3群土器は、A類が吉田格氏のいう称名寺式第一群土器に、B類、C類が称名寺式第二群土器に対比されよう。⁽²⁾ 第2号土器から出土した第9図7~12の資料は、A類であるが、微隆起をもつ土器は伴出しなかった。A類のなかでも2種は比較的薄く、ヘラ状工具で太く深い沈線が描かれ、第10図15のように沈線が内面にやや影響しているようなものもあることから町見通宏氏や安孫子昭二氏が論じているように、西日本の平氏、中津式との関係も考えられ、本県における称名寺式土器を考え上で今後注目してゆくべき土器であるといえる。B類、C類の中では、C類4種、5種のように太めの沈線だけで文様が構成されるものは、後期初頭の地域差として多摩丘陵などでは称名寺式第二群に併行するのではないかとされている。⁽³⁾ それ故ここでは第3群に含めた。本遺跡においては、A類、C類に比べB類が少ないと注目される。

以上のように本遺跡の主体をしめる第2群及び第3群土器は、中期終末から後期初頭というひじょうに短かい時間内に包括されるものであり、そのあり方が問題となる。東京・神奈川などでは、加曾利E式土器の終末と称名寺式土器の古手が伴出することが知られており、称名寺式土器の位置づけが問題となっている。今回の調査では、遺構が少なく、わずかに第2号土器から第3群土器A類に含まれる土器が出土しているが、微隆起をもつ土器は伴出していない。

しかし、本例だけをもって第2群と第3群が共存しないとするには早急であろう。むしろほとんどの土器が同一包含層からの出土であり、縦年的には本遺跡出土の土器は、第2群から第4群へと、時間的には重複する部分を有しながら推移していくとも考えられよう。つまり本県においては、敷島町金の尾遺跡などでも加曾利E式土器終末と称名寺土器が同一包含層から出土している例がある。^注故に、この上荻原遺跡や金の尾遺跡の土器のあり方が中期から後期へ移行する自然の姿である可能性もあるといえよう。称名寺式土器は、加曾利E式土器、壠之内式土器と併出する例が多く、純粹な称名寺式土器のみを出土するものが少ないとそのあり方を示すと言えるのではないだろうか。

3. 石 器

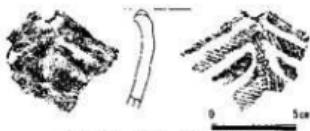
本遺跡から出土した石器類の中で注目すべきものとして2点の切目石錘がある。いずれも重量100gを計る大型のもので、縦方向のみに切目がつけられるものである。この種の石錘は、本県においては時期こそ若干異なるが早川町御料平遺跡で1例出土しているにすぎない。また、石錘そのものの出土は、極めて少なく、中期においては数例知られているにすぎず、これらがすべて漁撈に使用されたものであるとはいえないが、改めて本県中期文化の生態系を窺い知ることができよう。

4. おわりに

今回の調査において上荻原遺跡は、縄文時代中期終末から後期初頭に主体があることが明らかになった。本県においてはこの時期の遺跡の調査例は少なく、牧丘町古宿道の上遺跡、御坂町三光遺跡、敷島町金の尾遺跡、小淵沢町上平出遺跡などがあるにすぎない。今後、縦年の位置づけと伴出関係をおさえ、近隣諸地域はもとより、西日本を含めた広範な地域での検討が必要であろう。

〈注〉

1. この種の梯度状条線を地文とする中期末の土器には、曾利系のものと加曾利E系のものがある。曾利系のものとしては、山梨県須原遺跡等から出土しているが、終末のものはあまり知られていない。これに対して加曾利E系のものは、口縁部に無文帶を置き条線文を施すものが多く、神奈川県吉井城山貝塚、称名寺貝塚、下北原遺跡、東京都平尾遺跡などで出土しており中期末から後期初頭にかけて存在するようである。
2. 称名寺貝塚の調査で吉田格氏が、「称名寺A貝塚のものを称名寺式第一群と名づけ関東地方における後期縄文文化の初頭に位置づけられるもので、加曾利E式直後の土器であり、称名寺B貝塚出土の称名寺式第二群上器は、次の壠之内式土器へ続く土器である」としたものである。
3. 東京平尾遺跡の報告書において可見通宏氏、安孫子昭二氏が論じている。両氏は、平和台I遺跡9号住居址出土のこの種の土器に注目し、称名寺式土器の成立を中津式土器と関連づけて論ぜられた。そ



第15図 出土土器拓影

の後、安孫子昭二氏は、「シンボジウム 繩文時代中期後半の諸問題」 神奈川考古第11号において平式との関連を指摘している。

本遺跡出土の第9図15の土器には、沈線施文の際のミミズ脛れ状の突出が内面にみられ、平式、中津式との関連が考えられる。(第15図)

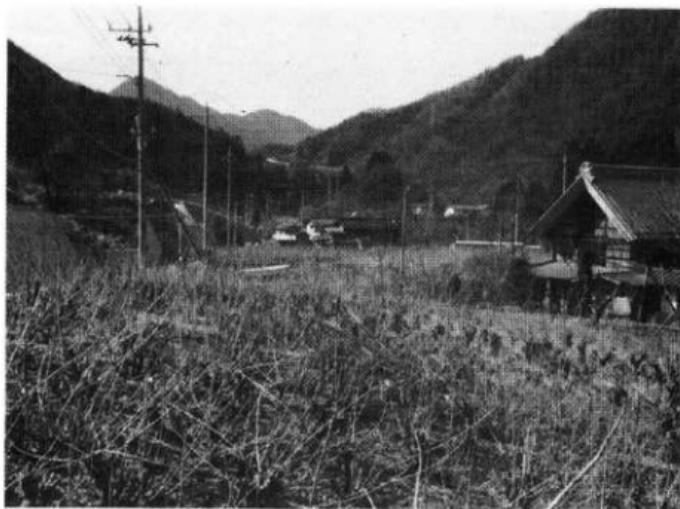
4. 東京平尾遺跡では、沈線を主体とする平尾I類土器を、器形、文様、施文等から分析し、後期初頭に位置づけている。この種の上器は、堀之内式土器との関連はうすく、称名寺式土器の系統にあるとされ、多摩丘陵における地域性であるとされている。

5. 末木健氏、米田明訓氏の御教示による。

【参考・引用文献】

- 1) 吉田格「横浜市称名貝塚」東京都武藏野郷土館調査報告書第1冊、1960
- 2) 安孫子昭二他「平尾遺跡調査報告Ⅰ」南多摩郡平尾遺跡調査会、1971
- 3) 今村啓爾「称名寺式土器の研究」考古学雑誌第63巻第1号、第2号、1977
- 4) 神奈川考古同人会「繩文時代中期後半の諸問題」神奈川考古第10号、第11号、1980
- 5) 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(二)」横須賀市博物館研究報告第7号、1963
- 6) 末木健「曾利式土器」「繩文文化の研究」4、1982
- 7) 柿沼修平「称名寺式土器」「繩文文化の研究」4、1982
- 8) 鈴木保彦他「下北原遺跡」神奈川県教育委員会、1977
- 9) 伊藤富治他「前原遺跡」国際基督教大学考古学研究センター、1977
- 10) 折原繁他「千葉市中野惣御堂遺跡」千葉県文化財センター、1976
- 11) 小野正文他「御坂町の埋蔵文化財」御坂町教育委員会、1979
- 12) 森和敏「古宿道の上遺跡」山梨県教育委員会、1981
- 13) 末木健・伊藤恒彦「山梨県北巨摩郡小淵沢町上平出遺跡の繩文時代後期土器について」信濃第29巻第4号、1977
- 14) 日原喜昭「見畠遺跡」三富村教育委員会1982
- 15) 甲斐丘陵考古学研究会「御料平遺跡」早川町教育委員会、1977

図 版



遺跡全景（北より）



B区下段全景（東より）



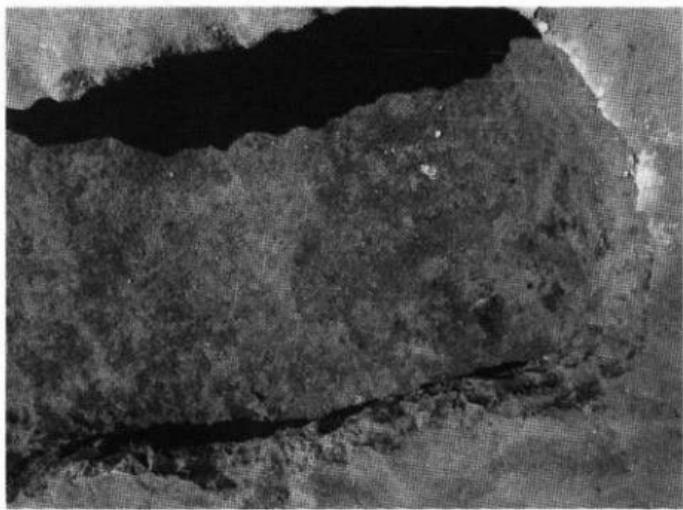
1号土壤



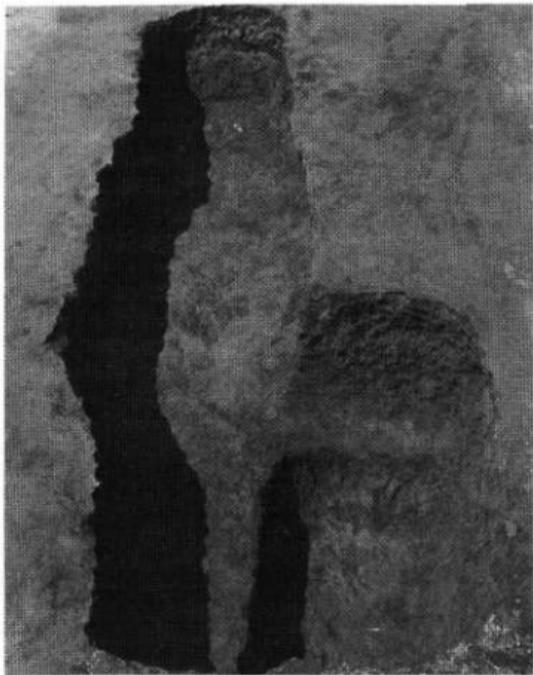
1号土壤セクション



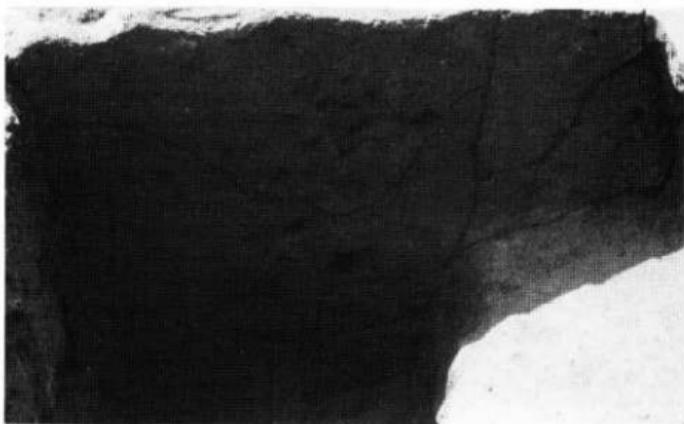
2 号 土 壤



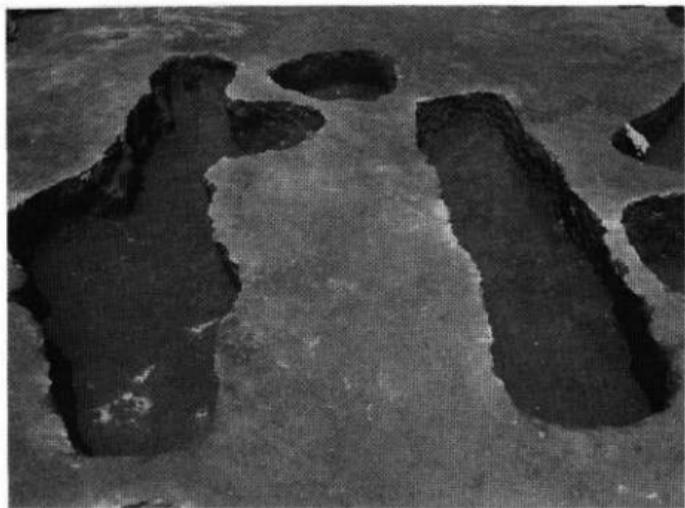
2 号 土 壤



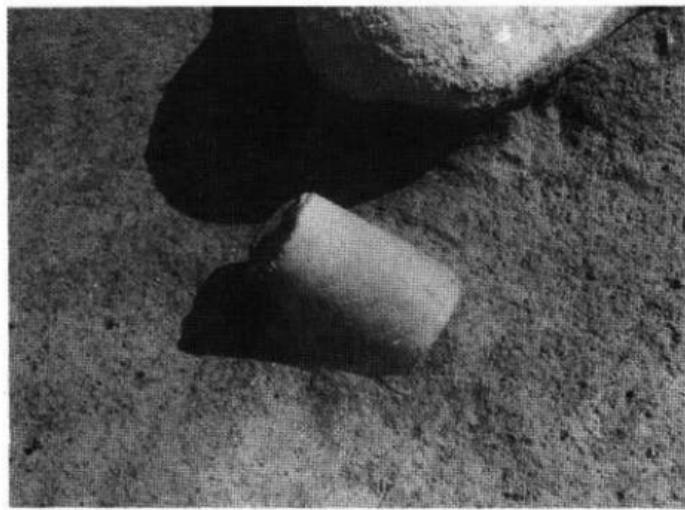
1. 2号溝状造構



1. 2溝状造構セクション



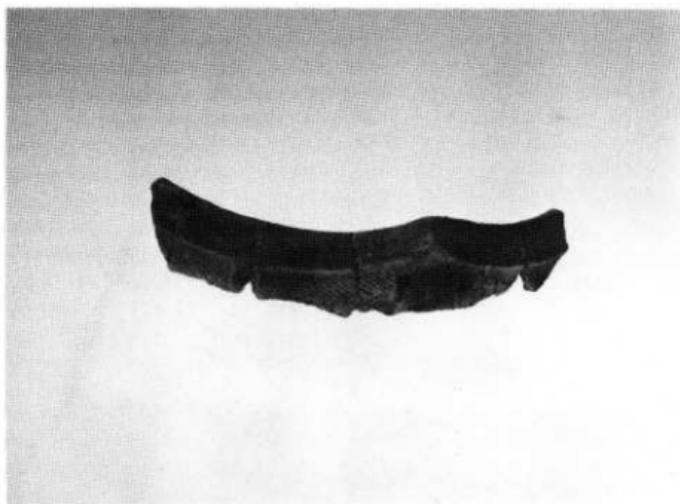
5. 6号溝状造模



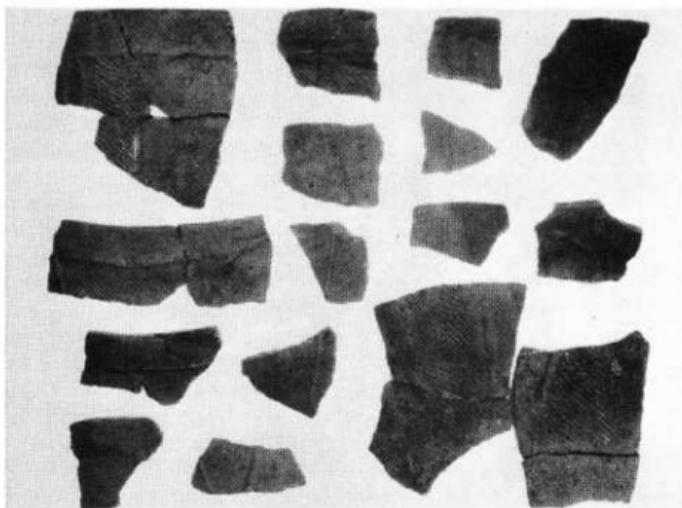
石棒出土状态



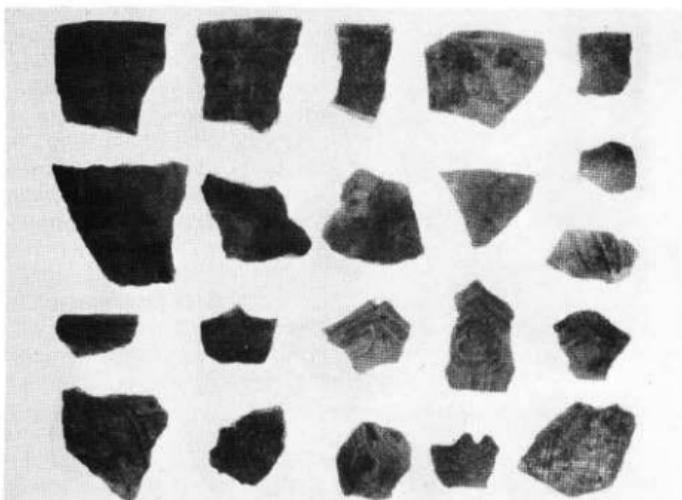
出土遗物（土器）



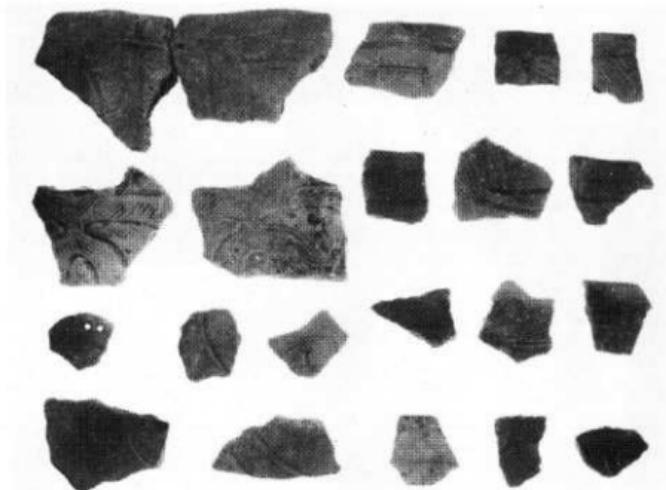
出土遗物（土器）



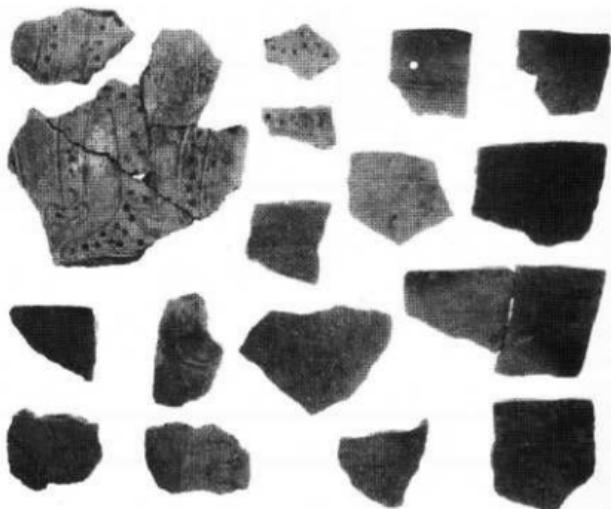
出土遺物（土器）



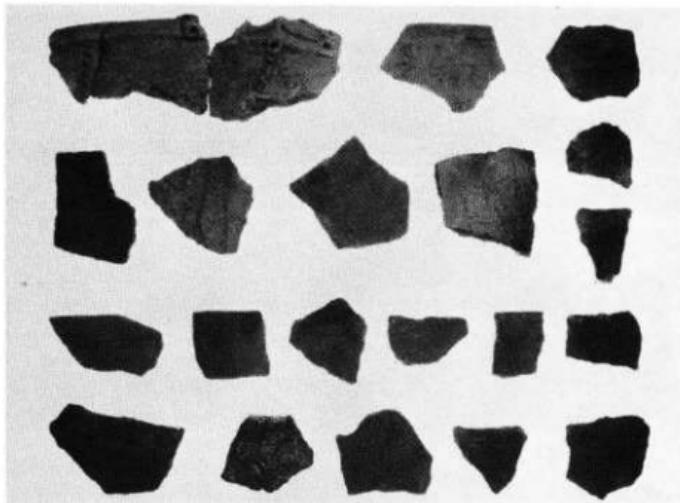
出土遺物（土器）



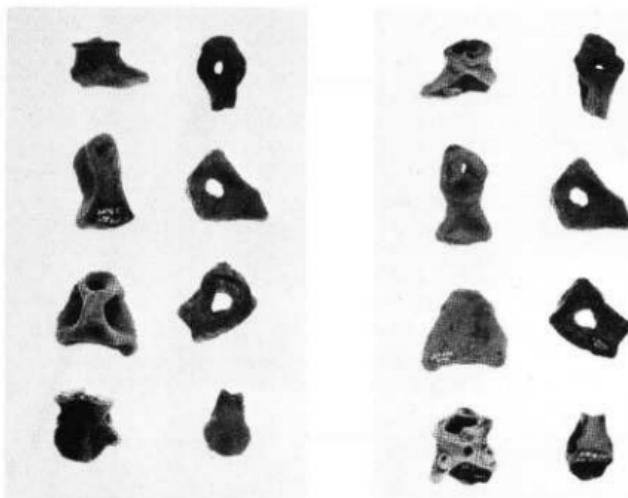
出土遺物（土器）

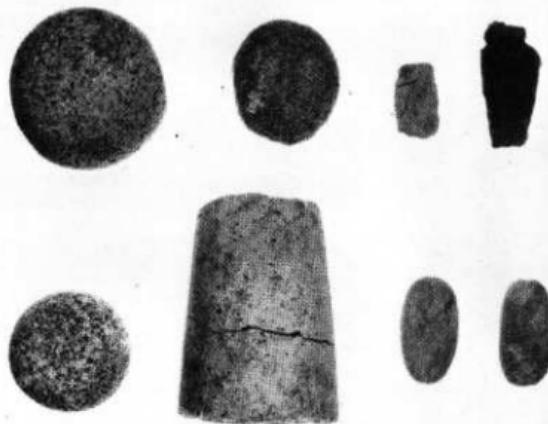


出土遺物（土器）

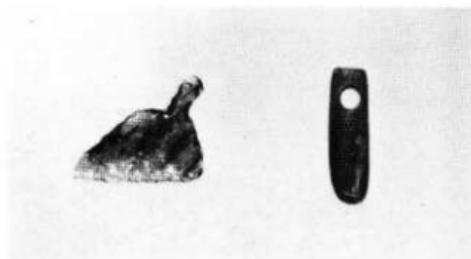


出土遗物（土器）





出土遺物（石器、石製品）



出土遺物（石器、石製品）



出土遺物（炭化物）

山梨県・三富村

上荻原遺跡

印刷 昭和58年3月25日

発刊 昭和58年3月31日

発行所 山梨県三富村
教育委員会

印刷所 まいづる印刷
甲府市相生2丁目14-8
TEL(0552)35-5723

